神蟲文庫 掌編（一）

森司朱史

目次

概要

この作品はフィクションです。
実在の人物や団体などとは関係ありません。

「神蟲じんちゅう文庫」&「東瀛篤國とうえい あつくに」

【キャラ紹介】

◎佐東さとう天雀てんじゃく

戊寅、八月五日生、二十八歳

幼いころから禍神が見え。

「禍神殺し」とされる理由も分からずに生きてきた。

十五歳から渡部相談所に居候。調査員、お祓いの仕事や、禍神退治を行う。

掌編（一）

遠くからクラクションの音が聞こえて。また、集中力が途切れてしまった。
郊外にある農家の倉に〝怪異〟が発生してる。というので、依頼を受けたが。農家の敷地が道路沿いにあり。時々、調子の狂う音が聞こえて、集中力が乱れ。
そして、想定していたよりも古い時代からの〝それ〟に苦戦していた。
とりあえず。ひと休みしよう、と。
〈祓い屋〉の男が詠唱を止めたところ――。家主である男の話し声が聞こえたので、そちらに視線を向けた。
すると。見知った初老の男が、真っ黒なスーツ服の長身の男と話し合っていた。
初老の男は家主で、スーツの男は見知らぬ存在である。
そうして、二人は倉に近づいてきた。
「――彼は？」と、〈祓い屋〉の男が家主に問い掛けると。
「……――あぁ、すみません。新しく頼んだ方です」
〝新しく〟ということは、同じ〈祓い屋〉家業なのだろう。
「え？　勝手に困りますよ」
「すみません。なかなか開かないので……」
「……はぁ、……」
〈祓い屋〉の男は、溜息を吐き。
倉の壁に張ってある呪符をいじらないように、スーツの男に注意した。
「君、同業者と思うけど。でしゃばらないでくれる？」
倉のなかには、何も納められてない。
この倉が開かなくなったのは、三十五年前とされている。

　何度か、開ける試みはされたが、何人も瘴気による熱病になり。中止されたそうだ。
　今の家主は養子で入り。この倉に〝何があったか〟という資料も消失してしまってて。詳しいことが分からなく、対応も難しく。
　同業者とはいえ。もしも、素人だとしたら、任せられる内容ではない。
　すると、スーツの男は「同業者なんですか？　〝コレ〟で……」と、口もとに笑みを浮かべた。
「どういう意味だ？」
　自分と同年代と思われる男から。まるで、先生から採点されたかのように言われてしまい。言い返そうとして、
「……――いいえ。貴方の術は確かなものです」と、彼は言い。
　倉の壁に張ってある呪符を観察しはじめて、「だけど、突破できないんですよね？」と、首を傾げた。
　そうして、スーツ服の内ポケットから呪符を取り出すと、器用に札を折りはじめた。
　何を行ってるのだろうか。と、思ってると。
　彼は、折った呪符を上空へと投げた。
（……――折り紙の飛行機？）
　倉の屋根近くに向かった折り紙の飛行機は、壁に当たる直前で――折られた部分が展開。
　呪符は壁に張り付き。途端、〈ドンッ！〉という衝撃が起り。
　倉の扉が、開いた。
「おおっ！　開いた！」と、家主が感嘆の声を上げる。
「――えっ！？　……祓われた？　僕でも三日目なのに？」
「開いて、よかったですね」
　倉に閉じ込められていた〝禍わざわい〟が、開いた倉の扉から上

空へと、白雲のように飛び立ち、消えて行ったことを――。〈祓い屋〉の男も、家主も気づかなかったが。

　ただ一人、そのことを確かめたスーツの男は、

「倉は開いたようなので。僕は、これで失礼しますね」と、二人に背を向けて。

　農家の敷地から出て行こうと、足を動かした。

「ちょっと待って！　君の名前は？」

　〈祓い屋〉の男が声を掛けると、スーツの男は足を止めて。

「……――佐東さとう天雀てんじゃく、と言います。渡部わたべ相談所を……よろしく」

　去って行く、彼の後ろ姿を見送る〈祓い屋〉の男は、思った。

　彼は、天才と言うよりは、天災の者。

　〝怪異〟や〝妖あやかし〟を〝祓う〟だけでなく、

　〝神殺し〟も成せるような、そんな存在なのだろう――。

神蟲文庫『掌編（一）』了

神蟲文庫『掌編（一）』

発行日　　二〇二六年八月十三日
著　者　　森司朱史／（編纂）瀧本千聖
発行元　　東瀛篤國